第二十講　実践演習⑽『平家物語』

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

（落ちのびた屋島を出て、再び都に向かった三位中将維盛（これもり）は、その途中で高野山を訪れた。）

高野に年ごろ知り給へる①聖（ひじり）あり。三条の斎藤左衛門大夫（たいふ）以頼（もちより）が子に、斎藤滝口時頼といひし者なり。もとは小松殿の侍なり。十三の年本所へ参りたりけるが、建礼門院の雑仕（ざふし）横笛といふ女あり。滝口これを最愛す。父是をつたへ聞いて、「世にあらん者のむこ子になして、出仕なんどをも心やすうアせさせんとすれば、世になき者を思ひそめて」と、イあながちにいさめければ、滝口申しけるは、「西王母（せいわうぼ）と聞こえし人、昔はありて今はなし。東方朔（とうばうさく）といひし者も、名をのみ聞きて目には見ず。老少不定（らうせうふぢやう）の世の中は、石火の光にことならず。たとひ人、長命といへども、七十八十をば過ぎず。そのうち身のさかんなる事は、わづかに二十余年なり。夢まぼろしの世の中に、みにくき者をかた時も見て何かせん。思はしき者を見んとすれば、父の命（めい）をそむくに似たり。是善知識なり。しかじ、うき世を厭（いと）ひ、まことの道に入りなん」とて、十九の年、もとどり切りて、嵯峨の往生院におこなひすましてぞ居たりける。

横笛これをつたへ聞いて、「ウわれをこそすてめ、様をさへかへけん事のうらめしさよ。たとひ世をばそむくとも、などか

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

かくと知らせざらん。人こそ心強くとも、たづねて恨みん」と思ひつつ、ある暮がたに都を出でて、嵯峨の方(かた)へぞあくがれゆく。ころはきさらぎ十日あまりの事なれば、梅津の里の春風に、よその匂ひもなつかしく、大井河の月影も霞(かすみ)にこめておぼろなり。一方(ひとかた)ならぬ哀れさも、誰ゆゑとこそ思ひ②けめ。往生院とは聞きたれども、さだかにいづれの坊とも知らざれば、ここにやすらひかしこにたたずみ、たづねかぬるぞむざんなる。住みあらしたる僧坊に、念誦(ねんじゆ)の声しけり。滝口入道が声と聞きなして、「わらはこそ是までたづね参りたれ。様のかはりておはすらんをも、今一度見奉らばや」と、具したりける女をもちてエいはせければ、滝口入道むねうちさわぎ、障子のひまよりのぞいて見れば、まことに尋ねかねたるけしきいたはしうおぼえて、いかなる道心者も心よわくなりぬべし。オやがて人を出だして、「まつたく是にさる人なし。門たがへでぞあるらむ」とて、遂にあはでぞかへしける。横笛なさけなううらめしけれども、力なう涙をおさへて帰りけり。滝口入道、同宿の僧に会ひて申しけるは、「是もよにしづかにて念仏の障碍(しやうげ)は候はねども、カあかで別れし女に此の住ひをキ見えて候へば、たとひ一度は心強くとも、又もしたふ事あらば、心もはたらき候ひぬべし。いとま申して」とて、嵯峨をば出でて高野へのぼり、清浄心院(しやうじやうしんゐん)にぞ居たりける。横笛も様をかへたるよし聞こえ③しかば、滝口入道一首の歌を送りたり。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

そるまでは恨みしかどもあづさ弓まことの道にいるぞうれしき

横笛が返りことには、

そるとてもなにか恨みんあづさ弓ひきとどむ④べき心ならねば

横笛はその思ひのつもりにや、奈良の法花寺(ほっけじ)にありけるが、いくほどもなくて、遂にはかなくなり⑤にけり。滝口入道、かやうの事を伝へ聞き、いよいよふかくおこなひすまして居たりければ、父も不孝をゆるしけり。したしき者共もみな用ひて、高野の聖とぞ申しける。

（『平家物語』より）

注　本所…武者所。
建礼門院…平清盛の娘、徳子。高倉天皇の中宮となった。
雑仕…雑役に従事した下女。
西王母…中国の伝説上の仙女。長寿を願う漢の武帝に桃を与えたという伝説がある。
東方朔…漢の時代の文人。西王母の桃を盗んで食べ、長寿を得たと伝えられる。
石火…石を打つときに出る火の光。短い時間のたとえ。
善知識…仏道に導く契機となるもの。
清浄心院…高野山の蓮花谷にある塔頭。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　傍線部①の「る」、②の「けめ」、③の「しか」、④の「べき」、⑤の「に」の意味として、最も適当と思われるものを、次の中からそれぞれ選べ。

1　受身　2　婉曲　3　過去　4　可能　5　完了
6　強意　7　推量　8　存続　9　伝聞　10　過去推量

①＝　②＝　③＝　④＝　⑤＝

問二　傍線部アの「せさせ」、エの「いはせ」、キの「見え」の主体は誰か。次の中からそれぞれ選べ。

1　以頼　2　横笛　3　三位中将
4　滝口入道　5　同宿の僧　6　具したりける女

ア＝　エ＝　キ＝

問三　傍線部イの「あながちにいさめければ」、オの「やがて人を出だして」を、それぞれ現代語訳せよ。

イ＝

オ＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　傍線部ウの「われをこそすてめ」の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　私を見捨てるつもりだったのに
2　私を見捨てるのがいいと思って
3　私を見捨てるのはいいとしても
4　私を見捨てようとしたばかりに
5　私を見捨てるような人であれば

問五　傍線部カの「あかで別れし女」の意味として、最も適当と思われるものを、次の中から選べ。

1　あきらめて別れた女
2　いつの間にか別れた女
3　思いを告げずに別れた女
4　思い悩んで別れた女
5　嫌いになって別れた女
6　未練があるのに別れた女

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　本文の内容に合うものを、次の中から選べ。

1　滝口入道は、横笛と結婚することもかなわない浮き世のしがらみに絶望してしまい、出家の決意を固めた。
2　滝口入道は、再び横笛が尋ねてきたら、仏の道を志す気持ちがゆらぐと思い、誰にも言わず嵯峨を去った。
3　横笛は、友人の死を口実に自分と会うことを避けようとする滝口入道に対し、ますます恨みをつのらせた。
4　横笛は、仏門に入ったが、その後も滝口入道に対する思いがつのったためか、結局命を落としてしまった。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十講　復習問題

①　「あながちに徹して教へむ」の傍線部の意味として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　勝手に　　イ　無理に　　ウ　遠慮がちに
エ　穏便に　　オ　不用意に

②　「やがて神の御前にて書きたまふ。」の傍線部の意味として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　かろうじて　　イ　しだいに　　ウ　しばらくして
エ　すぐに　　オ　ゆっくりと

③　「さまかへ」の内容として最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　離縁すること
イ　出家すること
ウ　零落すること
エ　身を隠すこと
オ　髪上げをすること

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十講　模範解答

問一　①８　②10　③３　④４　⑤５

問二　ア１　エ２　キ４

問三　イ　無理に別れさせたところ
　　　　オ　すぐに人を（応対に）出して

問四　３

問五　６

問六　４

〔現代語訳〕

（維盛は）高野山に長年知っていらっしゃる聖がいる。三条の斎藤左衛門大夫以頼の子で、斎藤滝口時頼といった者である。もとは小松殿〔＝平重盛〕の家来の武士である。十三歳の年（滝口の武士に任ぜられて）武者所へ参上したところ、建礼門院の雑役に従事した下女である横笛という女がいる。滝口はこの女を非常にいとおしく思う。（滝口の）父がこれを伝え聞いて、「世間に認められているような者の婿にして、宮仕えなども安心にさせてやろうとしていると、世間に認められていない（身分の低い）者を思いはじめて（けしからん）」と、無理に別れさせたところ、滝口が申したことは、「西王母と申し上げた人は、昔はいて今はいない。東方朔といった者も、名前ばかりを聞いて目に見ることはない。老人と若者（どちらが先に死ぬか）決まっていないこの世は、石を打つときに出る火の光〔＝短い時間〕と異ならない。たとえ人が、長生きするといっても、七十歳八十歳を超えはしない。その中で身体が元気であるのは、わずかに二十年あまりである。夢や幻のようなこの世で、醜い者をほんの少しの間も妻にして何になろうか、いや、何にもならない。いとしいと思う者を妻にしようとすると、父の命令に背くも同然だ。これは仏道に導く契機となるものである。辛いこの世を離れ、仏道に入ってしまった方がよい」と言って、十九歳の年に、出家して、嵯峨の往生院に心を澄まして修行して過ごしていた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

横笛はこれを伝え聞いて、「（滝口が）私を見捨てるのはいいとしても、出家までしたとかいうことが恨めしいことよ。たとえ出家するとしても、どうしてこれこれと知らせないのだろうか。人が（出家の）決意が固いとしても、（探し出して）訪ねて恨みを言おう」と思い続けて、ある日の暮れかかる頃に都を出て、嵯峨の方へさまよって行く。頃は旧暦二月十日過ぎのことなので、梅津の里の春風に、（運ばれてくる）遠くの（梅の花の）香も心がひかれ、大井川を照らす月の光も霞に包まれてぼんやりしている。並々ではない悲しさも、誰のせいかと（横笛は）思っただろう。往生院（に滝口がいる）と聞いたけれども、はっきりとどの僧坊とも知らないので、ここに足を止めあちらに立ち止まり、探しあぐねているのは痛ましい。住み荒した僧坊に、念仏誦経の声がした。（横笛は）滝口入道の声だと聞いて思って、「私がここまで尋ねて参上した。出家していらっしゃるとかいう姿を、もう一度拝見したい」と、連れて来ていた女に命じて言わせたところ、滝口は胸騒ぎがし、襖のすき間から覗いて見ると、本当に探しあぐねていた様子が気の毒に思われて、どんな仏道修行者もきっと決意が弱くなるに違いない。（滝口入道は）すぐに人を（応対に）出して、「まったくここにそういう人はいない。家を間違えているのだろう」と言って、とうとう会わないで帰した。横笛は情けなく恨めしいけれども、どうにもならず涙をこらえて帰った。滝口入道が、同宿の僧に会って申し上げたことは、「ここも非常に静かで念仏の邪魔はありませんが、未練があるのに別れた女にこの住居を見られていますので、たとえ一回は決意が固く（彼女を帰らせ）ても、再び慕ってくることがあったならば、きっと心も動くに違いありません。（あなたには）お別れを申し上げて」と言って、嵯峨を出て高野山へ登り、清浄心院で過ごした。横笛も出家したということが耳に入ったので、滝口入道は一首の歌を送った。

そるまでは…＝剃髪して出家するまでは恨めしく思っていたけれども、あなたも仏の道に入ったことが嬉しい。

横笛の返事には、

そるとても…＝あなたが剃髪して出家したとしても、どうして私が恨めしく思うだろうか、いや、思わない。引き留めることができるあなたの決意ではないので。

横笛はそうした（辛い）思いの積み重ねであろうか、奈良の法花寺にいたが、それほども経たずに、とうとう死んでしまった。滝口入道は、このようなことを伝え聞き、ますます信心深く心を澄まして修行して過ごしていたので、父も勘当を許した。親しい者たちも皆（滝口入道のことを）信頼して、高野の聖と申し上げた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第二十講　解答解説

〔解説〕

①「あながちなり」は重要単語で、「無理だ」「強引だ」などの意味。よって、正解はイ。

②「やがて」は重要単語で、「すぐに」「そのまま」という意味。よって、正解はエ。

③「さま（を）かふ」は「出家する」ということ。よって、正解はイ。「出家」を表す単語はたくさんある。第六講で学んだ単語をしっかり覚えておくこと。

〔解答〕

①イ　②エ　③イ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。